小・中学校における古典学習系統表（資料）

【小学校】

	学習指導要領	教科書に収録されている題材（古典と文語　ただし△は文語詩，○は近代短歌・俳句）	
		光　村　図　書	東　京　書　籍
小学校第３学年	(ｱ)易しい文語調の短歌や俳句について，情景を思い浮かべたり，リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること。 (ｲ)長い間使われてきたことわざや慣用句，故事成語などの意味を知り，使うこと。 （指導事項は，３・４年共通）	上p48　声に出して読もう ・かすみたつ ながきはるひに こどもらと てまりつきつつ このひくらしつ　良寛 ・むしのねも のこりすくなに なりにけり よなよなかぜの さむしくなれば　良寛 ・古池や蛙飛びこむ水の音，閑かさや岩にしみ入る蝉の声　松尾芭蕉 ・菜の花や月は東に日は西に，春の海終日(ひねもす)のたりのたりかな　与謝蕪村 ・やれ打つな蠅(はえ)が手をすり足をする，雪とけて村いつぱいの子どもかな　小林一茶 ◎短歌と俳句の簡単な解説（いろは歌） 下p38　声に出して読もう ・荒海や佐渡によこたふ天の河　松尾芭蕉 ・さみだれや大河を前に家二軒　与謝蕪村 ・痩せ蛙まけるな一茶これにあり　小林一茶 ・久方の光のどけき春の日に静心なく花の散るらむ　紀友則 ・天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも　安部仲麿 下P74　かるたについて知ろう （かるたについての説明文，文中に百人一首の説明） ・おくやまに　もみじふみわけ　なくしかの　こえきくときぞ　あきはかなしき 下p130　付録　百人一首を楽しもう ・人はいさ心も知らず古里は花ぞ昔の香ににほひける　紀貫之 ・いにしへの奈良の都の八重桜けふ九重ににほひぬるかな　伊勢大輔 ・花の色は移りにけりないたづらに我が身世にふるながめせしまに　小野小町 ・春過ぎて夏きにけらし白妙(しろたえ)の衣干すてふ天の香具山　持統天皇 ・夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月宿るらむ　清原深養父 ・秋の田の仮庵(かりほ)の庵の苫(とま)をあらみ我が衣手は露にぬれつつ　天智天皇 ・秋風にたなびく雲の絶え間よりもれ出づる月の影のさやけさ　藤原顕輔 ・白露に風の吹きしく秋の野は貫きとめぬ玉ぞ散りける　文屋朝康 ・きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに衣片敷(かたし)き独りかも寝む　藤原良経 ・嵐吹く三室(みむろ)の山のもみぢ葉は竜田(たつた)の川の錦なりけり　能因法師 ・心あてに折らばや折らむ初霜の置きまどはせる白菊の花　凡河内躬恒 ・あさぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里に降れる白雪　坂上是則 ・夜をこめて鳥の空音(そらね)ははかるともよに逢坂の関は許さじ　清少納言 ・めぐり逢ひて見しやそれとも分かぬ間に雲隠れにし夜半(よは)の月かな　紫式部 ・天つ風雲の通ひ路吹き閉ぢよをとめの姿しばしとどめむ　僧正遍昭 ・大江山いく野の道の遠ければまだふみも見ず天の橋立　小式部内侍 ・忍ぶれど色に出でにけり我が恋は物や思ふと人の問ふまで　平兼盛 ・淡路島通ふ千鳥の鳴く声に幾夜寝覚めぬ須磨の関守　源兼昌 下p135　付録　「むすめふさほせ」（かるた取り）の説明 ・村雨の露もまだ干ぬまきの葉に霧立ちのぼる秋の夕暮れ ・住の江の岸に寄る波よるさへや夢の通ひ路人目よくらむ ・めぐり逢ひて見しやそれとも分かぬ間に雲隠れにし夜半(よは)の月かな ・吹くからに秋の草木のしをるればむべ山風をあらしと言ふらむ ・寂しさに宿を立ち出でてながむればいづくも同じ秋の夕暮れ ・ほととぎす鳴きつる方をながむればただ有明の月ぞ残れる ・瀬を早み岩にせかるる滝川のわれても末に逢はむとぞ思ふ	上p88　日本の言の葉　「慣用句を使ってみよう」 上p118　付録　読書の部屋「じゅげむ」 下p76　日本の言の葉　「俳句に親しもう」 ・菜の花や月は東に日は西に　与謝蕪村 ・ゆさゆさと大枝ゆるる桜かな　村上鬼城 ・雪とけて村いっぱいの子どもかな　小林一茶 ・山路来て何やらゆかしすみれ草　松尾芭蕉 ○青がえるおのれもペンキぬりたてか　芥川龍之介 ○ひっぱれる糸まっすぐや甲虫　高野素十 ・さみだれや大河を前に家二軒　与謝蕪村 ○赤とんぼ筑波に雲もなかりけり　正岡子規 ○いなびかり北寄りすれば北を見る　橋本多佳子 ・名月を取ってくれろと泣く子かな　小林一茶 ○遠山に日の当たりたる枯野かな　高浜虚子 ○冬菊のまとふはおのが光のみ　水原秋桜子 ○スケートのひもむすぶ間もはやりつつ　山口誓子

※参考　伝統的な言語文化に関する学習系統表（指導事項）

	口語調		文語調				創作
	リズム	読む	読む				表現
1年	言葉遊び かぞえうた わらべうた 早口言葉	昔話	いろは かるた				いろはかるた かぞえうた
2年		昔話 比較 民話	短詩				昔話
3年	かるた遊び 口上 文部省唱歌	とんち話 落とし話	俳句 （季節）			慣用句 ことわざ	俳句 川柳
4年		とんち話 （比較）	俳句 （季語）	連歌 川柳 百人一首	昔の話	慣用句 ことわざ	俳句 川柳 連歌
5年	文部省唱歌 近代詩	近代文学	俳句 （情景）	百人一首 短歌	古文	漢詩	俳句　短歌 随筆　漢詩
6年		近代文学 （比較）	俳句 （思い） （技法）	百人一首 短歌	古文	漢詩	俳句　短歌 随筆　漢詩

小 4		上p29　季節の言葉　「夏近し」 ・折々は腰たたきつつつむ茶かな　小林一茶 上p58　〔声に出して読もう〕 ・雀の子そこのけそこのけ御馬が通る　小林一茶 ・夏河を越すうれしさよ手に草履　与謝蕪村 ・名月や池をめぐりて夜もすがら　松尾芭蕉 ・君がため春の野に出でて若菜摘む我が衣手に雪は降りつつ　光孝天皇 ・田子の浦に打ち出でて見れば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ　山部赤人 ・これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬも逢坂の関　蝉丸 下p27　季節の言葉　「秋深し」 ・稲かれば小草（おぐさ）に秋の日のあたる　与謝蕪村 下p42　声に出して読もう ○柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺　正岡子規 ○桐一葉日当たりながら落ちにけり　高浜虚子 ○咳の子のなぞなぞあそびきりもなや　中村汀女 ○ふるさとの山に向かひて言ふことなし/ふるさとの山はありがたきかな　石川啄木 ○金色のちひさき鳥のかたちして銀杏ちるなり夕日の岡に　与謝野晶子 ○ゆく秋の大和の国の薬師寺の塔の上なる一ひらの雲　佐々木信綱 下p72　季節の言葉「春立つ」 ・袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらん　紀貫之 ・雪解けや春立つ一日（ひとひ）のあたたかさ　正岡子規 下p132　**付録**　「知ると楽しい故事成語」 ・蛇足，五十歩百歩	上p80　日本の言の葉　「ことわざブック」を作ろう ・ことわざ，「いろはかるた」の説明，故事成語（五十歩百歩） 下p80　日本の言の葉　「百人一首」を声に出して読んでみよう ・あらしふく三室の山のもみぢ葉は竜田の川の錦なりけり　能因法師 ・春すぎて夏きにけらし白妙の衣ほすてふ天の香具山　持統天皇 ・田子の浦にうちいでて見れば白妙の富士の高嶺に雪はふりつつ　山部赤人 ・奥山にもみぢふみ分けなく鹿の声聞くときぞ秋は悲しき　猿丸大夫 ・天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも　安倍仲麻呂 ・君がため春の野にいでて若菜つむわが衣手に雪はふりつつ　光孝天皇 ・久方の光のどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ　紀友則 ・人はいさ心も知らずふるさとは花ぞ昔の香ににほひける　紀貫之 ・秋風にたなびく雲の絶え間よりもれいづる月の影のさやけさ　左京大夫顕輔 ・ほととぎす鳴きつる方をながむればただ有明の月ぞ残れる　後徳大寺左大臣
小 5	(ｱ)親しみやすい古文や漢文，近代以降の文語調の文章について，内容の大体を知り，音読すること。 (ｲ)古典について解説した文章を読み，昔の人のものの見方や感じ方を知ること。	■p28　季節の言葉　「春から夏へ」 △夏は来ぬ　佐佐木信綱 ○花冷えに欅はけぶる月夜かな　渡辺水巴 ○目には青葉山ホトトギス初がつお　山口素堂 ○舟に子のひだるき顔や風かほる　松窓乙二 ■p49　声に出して読もう　「今も昔も」 **竹取物語**「今は昔，竹取の翁といふものありけり。～いとうつくしうてゐたり。」 **枕草子**　「春はあけぼの。～雨など降るもをかし。」 **平家物語**「祇園精舎の鐘の声，諸行無常の響きあり。～ひとへに風の前の塵に同じ。」 ■p84　季節の言葉　「夏の日」 ○夏の日のくれゆく時に海原と空との色は見飽かざりけり　岡　麓 ○門ありて唯夏木立ありにけり　高浜虚子 ○涼風や青田の上の雲のかげ　森川許六 ・夕立の雲もとまらぬ夏の日のかたぶく山に日ぐらしの声　式子内親王 ・雲の峰いくつ崩れて月の山　松尾芭蕉 ■p86　詩を楽しもう △「われは草なり」　高見順 ■p126　季節の言葉　「秋の空」 ○鰯雲天にひろごり萩咲けり　水原秋桜子 ■p144　声に出して読もう　**論語** ・子曰く「己の欲せざる所は，人に施す勿かれ。」と。 ・子曰く「過ちて改めざる，是を過ちと謂ふ。」と。 ・子曰く「学びて思はざれば，則ち罔（くら）し。思ひて学ばざれば，則ち殆し。」と。 ■p164　詩を楽しもう　「詩の楽しみ方を見付けよう」 △紙凧　井伏鱒二， △土　三好達治	上p78　日本の言の葉　「古文を声に出して読んでみよう」 **竹取物語**「今は昔，竹取の翁といふものありけり。～いとうつくしうてゐたり。」 **徒然草**　「つれづれなるままに，日ぐらし，～あやしうこそものぐるほしけれ。」 **平家物語**「祇園精舎の鐘の声，諸行無常の響きあり。～ひとへに風の前の塵に同じ。」 上p92　詩と俳句を味わおう △詩　「山のあなた」カール・ブッセ 俳句・閑かさや岩にしみいる蝉の声　松尾芭蕉 ○遠足のおくれ走りてつながりし　高浜虚子 ○夏草に汽缶車の車輪来て止まる　山口誓子 ○落ち葉たくけむりまとひて人きたる　水原秋桜子 ○白葱のひかりの棒をいま刻む　黒田杏子 下p82　日本の言の葉　「古文に親しもう」 **枕草子**「春はあけぼの。～細くたなびきたる。」 「九月つごもり，十月のころ，空うちくもりて，～いとあはれなり。」 「ふるものは，雪。あられ。～白き雪のまじりてふるをかし。」

		■p188　季節の言葉　「冬から春へ」 △冬の星座　ウィリアム＝ヘイス作　堀内敬三訳 ○夕焼けてなほそだつなる氷柱かな　中村汀女 ・東風吹かばにほひおこせよ梅の花主なしとて春な忘れそ　菅原道真 ■p248　**付録**　「古典の世界」 　**徒然草**　「高名の木登り」	
小 6		■p30　季節の言葉　「春はあたたか」 **漢詩**「春暁」　孟浩然 ・「春宵一刻値千金」　蘇軾 ○子等は皆貝を拾ふといで行きて磯のはたごや昼静かなり　落合直文 ○故郷やどちらを見ても山笑ふ　正岡子規 ■p58　伝統文化を楽しもう　「伝えられてきたもの」 　文学史の説明文 　日本最古の「万葉集」，日本で初めての物語「竹取物語」，すぐれた長編「源氏物語」（紫式部），随筆の始まり「枕草子」（清少納言），鎌倉室町時代武士が活躍する作品「平家物語」，随筆「徒然草」（兼好法師），江戸時代には町人文化がさかんになる「東海道中膝栗毛」（十返舎一九），俳句が生まれる。 　能と狂言は室町時代に行われるようになった演劇。江戸時代には歌舞伎と浄瑠璃（文楽）が生まれた。 ■p61　**狂言**　「柿山伏」 ■p76　季節の言葉　「夏は，暑し」 ・暑き日を海にいれたり最上川　松尾芭蕉 （注）真夏の灼熱の太陽の一日を軽々と包容する無辺の日本海に注ぐ最上川の広大な河口。（『**奥の細道**』所収） ○夕立が洗つていつた茄子をもぐ　種田山頭火 ○日焼け顔見合ひてうまし氷水　水原秋桜子 ○炎天の地上花あり百日紅　高浜虚子 ■p78　短歌を作ろう　「たのしみは」 ・たのしみは妻子（めこ）むつまじくうちつどひ頭ならべて物をくふ時　橘曙覧（あけみ） ・たのしみは昼寝目ざむる枕べにことことと湯の煮えてある時 ・たのしみは朝おきいでて昨日まで無かりし花の咲ける見るとき ■p81　「とんぼ」の俳句を比べる ・蜻蛉（とんぼう）やとりつきかねし草の上　松尾芭蕉 ○肩に来て人懐かしや赤蜻蛉　夏目漱石 ○大空にとどまつてをる蜻蛉かな　高浜虚子 ○とどまればあたりにふゆる蜻蛉かな　中村汀女 ■p126　本は友達　「永訣の朝」の一部 ■p130　季節の言葉　「秋は，人恋し」 　**漢詩**「静夜思」　李白 ・見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ　藤原定家 ・ちる芒寒くなるのが目にみゆる　小林一茶 ・秋深き隣は何をする人ぞ　松尾芭蕉 ■P150　声に出して楽しもう 「天地の文」福沢諭吉（注）（『啓蒙手習いの文』（上下二巻）所収）明治四年出版。 ■p172　季節の言葉　「冬は，春の隣」 △「早春賦」（春は名のみの風の寒さや…）　吉丸一昌	上p76　日本の言の葉　「漢文を読んでみよう」 **故事成語**　「百聞不如一見」 **論語**　「一を聞きて以つて十を知る」 　子曰く，「故きを温めて新しきを知らば，以つて師となるべし。」と。 **「十七条の憲法」**　聖徳太子　「一日以和為貴無忤為宗」 **漢詩**「春暁」　孟浩然 上p88　詩と短歌を味わおう 短歌，万葉集の説明 ○夏のかぜ山よりきたり三百の牧の若馬耳ふかれけり　与謝野晶子 ○真砂なす数なき星のその中にわれにむかひて光る星あり　正岡子規 ○病める児はハモニカを吹き夜に入りぬもろこし畑の黄なる月の出　北原白秋 ○やわらかな秋の陽ざしに奏でられ川は流れてゆくオルゴール　俵万智 ○てのひらにてのひらをおくほつほつと小さなほのおともれば眠る　東直子 ○校庭の地ならし用のローラーに座れば世界中が夕焼け　穂村弘 下p88　日本の言葉　「伝えよう，大切にしたい名言」 学問のすすめ　福澤諭吉「天は人の上に人をつくらず人の下に人をつくらず。」 論語　「朋あり遠方より来たる，また楽しからずや。」 　「己のほっせざるところを人にほどこすことなかれ」 **故事成語**　「人事をつくして天命を待つ」 　「少年老い易く学成り難し，一寸の光陰軽んずべからず」 下p120　**付録**「伝統芸能に親しもう」 「能」「狂言」「人形浄瑠璃」「歌舞伎」「落語」「三河万歳」「子ども文楽」についての説明。

【中学校】

	学習指導要領	教科書の題材（古典と文語　ただし△は文語詩，○は近代短歌・俳句）　※光村図書による		
		古文	漢文	言語事項，その他
中1	(ｱ)文語の決まりや訓読の仕方を知り，古文や漢文を音読して，古典特有のリズムを味わいながら，古典の世界に触れること。 (ｲ)古典には様々な作品があることを知ること。	■p129　いにしえの心にふれる ・p131**「いろは歌」** ・p134「七夕に思う」七夕をめぐる文学史の説明文 ・p138**「竹取物語」**　蓬莱の玉の枝 ・「今は昔，竹取の翁といふものありけり。～三寸ばかりなる人いとうつくしうてゐたり。」 ・皇子が冒険談から「蓬莱山」の様子を語る場面の一節 「これやわが求むる山ならむと思ひて，さすがに恐ろしくおぼえて，山のめぐりをさしめぐらして，～この花を折りてまうで来たるなり。」 ・かぐや姫昇天の後 「御文，不死の薬の壺並べて，火をつけて燃やすべしよし仰せたまふ。～その煙，いまだ雲の中へ立ちのぼるとぞ，言ひ伝へたる。」 　説明「古典の仮名遣い」	■p148　今に生きる言葉**「矛盾」** ・p151「漢文を読む」　訓読と書き下し文 ・p152「故事成語を使って文章を作る」 　漁夫の利，杞憂，塞翁が馬，背水の陣	■p35　季節のしおり　春 △「朧月夜」高野辰之　（菜の花畑に入り日薄れ…） △「小諸なる古城のほとり」島崎藤村 （小諸なる古城のほとり…〈一連のみ〉） ■p58　「はじめての詩」荒川洋治の文章 △国木田独歩の詩「山林に自由存す」冒頭 ■p62　「詩四編」 △「りんご」山村暮鳥 △「山のあなた」（一連のみ）カール・ブッセ作上田敏訳 △「蝉頃」室生犀星 ■p88　季節のしおり　夏 △「海」（松原遠く消ゆるところ…〈一連のみ〉） △「薔薇二曲」（薔薇ノ木ニ薔薇ノ花咲ク） ■p130　季節のしおり　秋 △「紅葉」高野辰之（秋の夕日に照る山紅葉…〈一連のみ〉） △「一つのメルヘン」中原中也 （秋の夜は，はるか彼方に…〈一連のみ〉） ■p205　季節のしおり　冬 △「冬景色」（さ霧消ゆる湊江の…〈一連のみ〉） △「冬が来た」高村光太郎　（きつぱりと冬が来た。…〈一連のみ〉）
中2	(ｱ)作品の特長を生かして朗読するなどして，古典の世界を楽しむこと。 (ｲ)古典に現れたものの見方や考え方に触れ，登場人物や作者の思いなどを想像すること。	■p30**「枕草子」**第１段 「春はあけぼの。～白き灰がちになりてわろし。」 ■ p134**「平家物語」** ・「平家物語」の作品解説と「祇園精舎の鐘の声，～塵に同じ。」 ・「扇の的」までの部分のあらまし 「ころは二月十八日の酉の刻ばかりのことなるに，～情けなしと言ふものもあり。」 ・弓流しの場面の解説 「弓の惜しさにとらばこそ。～みな人これを感じける。」 ■p144**「徒然草」** ①冒頭「つれづれなるままに，～あやしうこそものぐるほしけれ。」 ②仁和寺にある法師（五十二段）	■p147「漢詩の風景」 石川忠久による漢詩の説明文 ・「春暁」孟浩然 ・「絶句」杜甫 ・「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」 李白 ・p153　律詩について「春望」杜甫	■p29　季節のしおり　春 ・「枕草子」冒頭（春はあけぼの…） ・「せりなづなごぎやうはこべらほとけのざすずなすずしろこれぞ七草」 ○外にも出よ触るるばかりに春の月　中村汀女 ■p56　「新しい短歌のために」馬場あき子 ○くれなゐの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春雨の降る 正岡子規 ○川ひとすぢ菜たね十里の宵月夜母が生まれし国美くしむ 与謝野晶子 ○蚊帳の中に放ちし蛍夕さればおのれ光て飛びそめにけり　斎藤茂吉 ○深々と人間笑ふ声すなり谷一面の白百合の花　北原白秋 ■p60　「短歌十二首」 ○鳳仙花ちりておつれば小き蟹鋏ささげて驚き走る　窪田空穂 ○白鳥はかなしからずや空の青海のあをにも染まずただよふ 若山牧水 ○不来方のお城の草に寝ころびて空に吸はれし十五の心　石川啄木 ○街をゆき子供の傍を通るとき蜜柑の香せり冬がまた来る　木下利玄 ○桜ばないのち一ぱい咲くからに生命をかけてわが眺めたり 岡本かの子 ■p121　季節のしおり　秋 ・萩の花　尾花葛花　なでしこが花　をみなへし　また藤袴　朝顔が花 山上憶良 △秋の日の　ヴィオロンの…　ヴェルレーヌ △この明るさのなかへ…　八木重吉 ■p171　季節のしおり　冬 ○夕焼空焦げきはまれる下にして氷らんとする湖の静けさ 嶋木赤彦 ○遠山に日のあたりたる枯れ野かな　高浜虚子

	学習指導要領	教科書の題材（古典と文語　ただし△は文語詩，○は近代短歌・俳句）　※光村図書による		
		古文	漢文	言語事項，その他
中3	(ｱ)歴史的な背景などに注意して古典を読み，その世界に親しむこと。 (ｲ)古典の一節を引用するなどして，古典に関する簡単な文章を書くこと。	■p62　「俳句十六句」 ・古池や蛙飛びこむ水の音　松尾芭蕉 ・斧入れて香におどろくや冬こだち　与謝蕪村 ・名月をとつてくれろとなく子哉　小林一茶 ■p143　「君待つと」 **〔万葉集〕** ・春過ぎて夏来るらし白妙の衣乾したり天の香具山　持統天皇 ・東の野に炎（かぎろひ）の立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ　柿本人麻呂 ・君待つと吾が恋ひをれば我が屋戸のすだれ動かし秋の風吹く　額田王 ・天土の　分かれし時ゆ　神さびて　高く貴き駿河なる～ 田児の浦ゆうち出でて見れば真白にぞ不尽の高嶺に雪は降りける　山部赤人 ・憶良らはいまは罷らむ子泣くらむそを負ふ母も吾を待つらむそ　山上憶良 ・多摩川にさらす手作りさらさらに何そこの児のここだ愛しき　東歌 ・父母が頭かき撫で幸くあれといひし言葉ぜ忘れかねつる　防人歌 ・春の園紅にほふ桃の花下照る道に出で立つおとめ　大伴家持 **〔古今和歌集〕** ・人はいさ心も知らずふるさとは花ぞ昔の香ににほひける　紀貫之 ・秋きぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる　藤原敏行 ・思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせばさめざらましを　小野小町 ・飛鳥川淵は瀬になる世なりとも思ひそめてむ人はわすれじ　よみ人知らず **〔新古今和歌集〕** ・道の辺に清水流るる柳かげしばしとてこそ立ちどまりつれ　西行法師 ・見わたせば花ももみぢもなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ　藤原定家 ・玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることのよわりもぞする　式子内親王 和歌の表現技法について解説　枕詞，序詞，掛詞 ■p150　**「奥の細道」** ①冒頭「月日は百代の過客にして～表八句を庵の柱に掛け置く。」 ②p152　奥の細道の俳句地図及び俳句が数句 ③p154　平泉 「三代の栄耀一睡のうちにして，～卯の花に兼房みゆる白毛かな」 「かねて耳驚かしたる二堂開帳す。～五月雨の降り残してや光堂」	■p190　「論語」 ・子曰く，「学びて時にこれを習ふ，～また君子ならずや。」と。 ・子曰く，「故きを温めて新しきを知れば，もつて師たるべし。」と。 ・子曰く，「学びて思はざれば則ち罔し。思ひて学ばざれば則ち殆ふし。」と。 ・子曰く，「剛毅木訥，仁に近し。」と。 ■**資料**p250「受け継がれる物語」 （史記と項羽と劉邦）解説の文章 「力山を抜き気は世を蓋う…」 ■p158　**関連教材**　「古典の伝統」 **「源氏物語」**須磨の巻　解説と本文 「須磨にはいとど～所の秋なりけり。」 須磨の風景を生かしたその後の作品の解説 ・春の夜の夢の浮き橋とだえして峰に別るる横雲の空　藤原定家 ・見わたせばながむれば見れば須磨の秋　松尾芭蕉 ■p160「お薦めの古典を贈ろう」 古典の言葉を引用して思いを伝える文章を書く。 ■p189　季節のしおり　冬 ・山里は冬ぞさびしさまさりける人目も草もかれぬと思へば　源宗干 ・あさぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里に降れる白雪　坂上是則 ・うつくしや年暮れきりし夜の空　小林一茶 ■p260「古典文学の名作」本文と解釈 **「伊勢物語」**初冠「昔男～歌を書きてやる。」 **「土佐日記」**冒頭「男もすなる日記といふものを～送りす。」 **「源氏物語」**冒頭「いづれの御時にか～めづらかなるちごの御容貌り。」 **「更級日記」**冒頭「あづま路の道の果てよりも，～いかでかおぼえ語らむ。」 **「方丈記」**　冒頭「ゆく川の流れは～またかくのごとし。」	■p32　季節のしおり　春 ・石走る垂水の上のさわらびの萌え出づる春になりにけるかも　志貴皇子 ・世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし　在原業平 ・山路来て何やらゆかしすみれ草　松尾芭蕉 ■p58　「俳句の可能性」　宇多喜代子 ■p102　季節のしおり　夏 ・五月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする　よみ人しらず ・夏の夜はまだよひながら明けぬるを雲のいづこに月やどるらむ　清原深養父 ・をちこちに滝の音聞く若葉かな　与謝蕪村 ■p137　いにしへの心と語らう ■p138　季節のしおり　秋 ・秋更けぬ鳴けや霜夜のきりぎりすややかげ寒し蓬生の月　後鳥羽院 ・村雨の露もまだ干ぬ槙の葉に霧立ちのぼる秋の夕暮れ　寂蓮法師 ○朝顔につるべとられてもらひ水　千代女

（注）○教科書所収のものをすべて抜き出しているわけではありません。
　　○付録や関連教材の扱いかたは，学校によって異なります。